

「児童一人一人の力を伸ばす自立活動の授業作り」

【題材名】

K男（3年） 「カードで伝えようⅠ、両手を使おうⅡ」

L男（4年） 「身近な物の名前Ⅱ、両手を使おうⅠ」

M男（4年） 「考えて入れようⅠ、両手を使おうⅡ」

* 題材名が同じでも指導内容は児童により異なる。

伊勢崎市立伊勢崎養護学校
小学部 第3・4学年
奈良 雄策

【授業実践に臨むポイント】

- 視点① 実態に基づいた目標設定がなされ、生活に生きる力を高める。
- 視点② 課題解決に有効であり、児童の主体的に取り組む姿を引き出せる教材・教具や教室環境の工夫。
- 視点③ 児童が主体的に取り組める授業展開の工夫。

【授業実践から学んだこと】

(視点1に関して)

○日常生活の課題と結びつけた指導内容の設定

〈指導内容の例〉

「食事の場面を意識した課題」

・左手に物を持ちながら右手で操作をする。 ・必要に応じた物を選んで左手で持つようにする。等

「コミュニケーションを意識した課題」

・身近な物の名前を知る。 ・写真カードをホワイトボードに貼って自分の意思を伝える方法を習得する。等

〈結果として〉

給食では左手にお椀を持って食べるようになったり、教室から出かける際にはホワイトボードに行き先の写真カードを貼る姿が見られたりするなど授業で行っていることが日常生活にも生かされている。

(視点2に関して)

○児童の取組の結果を目に見える形に

K男がブラックボックスから引いた花型のクリップを見て、同じ色の台紙を選んで左手を持ち、クリップを留めたそれを大きな絵にかける活動を行った。K男自身が行った活動の結果「お花畑の絵」となり目に見えるので、主体的に取り組む姿を引き出すことにつながった。



○“終わり”が見えることの有効性

L男が左手に持ったお椀の中のスーパーボールを右手に持ったスプーンですくい、透明な筒の中に積み上げていく活動を行った。教師が1つずつスーパーボールをお椀に入れていくと“終わり”が見えにくく、集中力が欠けていた。初めからスーパーボールをすべてお椀に入れておくと“終わり”への見通しがもて、集中して取り組んでいた。

○教室環境の工夫の大切さ

写真カードを使って取り組む教材・教具の順番を提示し、教材・教具を入れた棚を設置したところ、児童は自分から学習を進めることができた。また、衝立を使いスペースを仕切ったことにより、児童が学習する場所を意識できるとともに、周囲からの刺激を減らせ、学習に集中する姿を引き出した。



(視点3に関して)

○見通しをもてるように

授業の流れ(あいさつ→手遊び→各自の学習→好きな活動)を毎時間一定にして行ったので、児童は活動への見通しをもち、落ち着いて取り組むことができた。

○教材の配列の工夫

「各自の学習」では、M男にT2が1対1で、K男とL男にT1が対応し、「T1と学習する時間」と「一人で学習する時間」を設定した。T1と学習するときには、これから身に付ける課題を中心とした学習を行い、一人で学習するときには、進め方が分かっている教材・教具を用いた学習を行った。「一人で学習する時間」には、T1が指示をしなくても一人で教材・教具に取り組んでいる姿が見られた。